

第4回文京区協働推進委員会担い手創出プロジェクト支援本部 要点記録

日 時：平成26年3月28日（金） 午前9時00分～12時30分

場 所：2102・2103 会議室

<会議次第>

- 1 開会
- 2 支援プロジェクトの継続審査等について
- 3 プレゼンテーション及び質疑について
- 4 プロジェクトの審査について
- 5 新たな公共プロジェクトの本年度の振り返りと次年度の予定について
- 6 その他
- 7 閉会

<出席者（名簿順）>

田中 芳夫 本部長（区民部長）、安藤 哲也 本部員、井上 英之 本部員、各務 茂夫 本部員、菊地 端夫 本部員、丁 寧 本部員、石嶋 大介 本部員（区民課長）、境野 詩峰 本部員（協働推進担当課長）

【関係課】

柳下 幸一 経済課長、山崎 克己 アカデミー推進課長、野田 香子 アカデミー推進課観光担当主査、須藤 直子 高齢福祉課長

【事務局等】 区民課主査（1）、区民課主任主事（1）、パートナー事業者（株式会社エンパブリック）（2）

<欠席者>

鈴木 秀洋 男女協働・子ども家庭支援センター担当課長

<議 論（要点）>

1 開会

田中区民部長：開会あいさつ

境野協働推進担当課長：出席状況と資料について確認。米国滞在中の井上本部員はスカイプによる参加。本日の第4回本部は、支援プロジェクトの継続審査を兼ねているため、各選考対象のプロジェクトの関係課も参加している。

2 支援プロジェクトの継続審査等について

境野協働推進担当課長：資料第14号に基づき、対象団体について説明。第1クールから第2クールへの継続希望団体は、子育てkitchenのハッピーファミリープロジェクト1件のみである。文京映画交流クラブは第2クールの支援を希望しないため、第1クールの報告のみを行う。また、8月から支援を行っているNPO法人街ing本郷の文人郷プロジェクトについては、第2クールまでのプロジェクトの実施結果の報告を行う。審査は、1団体当たり、プレゼンテーション10分、質疑応答15分の合わせて25分で進めていく。

3 プレゼンテーション及び質疑について

≪継続審査≫

<プレゼンテーション1>

プロジェクト名: ハッピーファミリープロジェクト

団体: 子育て kitchen

<質疑>

各務本部員: 4か月の取組を通して、このプログラムで何家族にサービスを提供できたと考えたらいいか。また、運営側の人数は何人か。

プレゼン団体: 今は、2クラスの実施で、計12家族が参加した。私以外に3人で運営をしており、料理中は最低2人はいるようにしている。

各務本部員: 値段設定に関しては採算がとれるものになっているか。

プレゼン団体: 多くの利益が出ているわけではないが、ギリギリで回っている状態である。

各務本部員: フランチャイズ化をしていくときにマニュアルの整備等標準化が必要になるが、こちらについてはまだ手が回らない状態ということか。

プレゼン団体: 必要性は感じているが、着手できていない状態である。

安藤本部員: 参加できる人は心配のない人、虐待問題を抱えている人、外に出ることができない人などへの、アウトリーチについてはどのように考えているか。

プレゼン団体: 現段階でそのような人にまでサービスを届けるのは難しいと感じている。子育てにおいては、「子どもに任せてみる」「親は見守る」ことが大切だと思っている。それができないという人を対象に徐々に広げていきたいと思っている。

安藤本部員: 広報手段について教えてほしい。

プレゼン団体: 現在はFacebookとホームページでの集客が多い。知人がシェアをしてくれたことで、申込者が増え、5月にはクラスを増設した。

各務本部員: 今のキャパシティで、参加する家族が増えても対応できるのか。

プレゼン団体: 現在は多少増えても対応できるが、それ以上となると難しい。他にもやってくれる人達が生まれてくるのが理想である。マニュアルでは伝わらないこともあるので、一緒に体験した参加者からそういう人達が出てきてほしい。

井上本部員: 問題への理解がとても進んでいて、ものすごく大きな進歩を感じた。親子共に自立が必要というアプローチが決まったのは、とても大きいこと。これを今後どんな形で運営し、展開していくのか考える必要がある。是非、マドレボニータを訪ねてみてほしい。マドレボニータは産後のお母さんのケアをしている団体で、体のケアだけでなく、コミュニケーションも教えている。また、運営の仕方も素晴らしく、プロフェッショナルなスキルを持つお母さん達同士がインターネットを使って、パートタイムで自分の時間を出し合い、専任が少ないままでも運営できるノウハウを蓄積している。表面の見える部分だけでなく、内部のやり方にとってもよいヒントがあると思う。

丁本部員: 今参加している12家族が住んでいるエリアは。

プレゼン団体：エリアは様々で、バスや電車で来る人もいる。水道や小石川、大塚など距離は関係ないようである。

各務本部員：今例えばプログラムに100家族が参加するとしたら、どのような方法を考えるか。自分の分身をつくるのか、またマニュアルなど標準化してできるものはそれに対応していくのか。

プレゼン団体：自分以外にできるひとを増やしたいと考えている。理論とやり方が分かれば、体験しなくても出来る人もいると思うので、理論を教えるプログラムと体感できるプログラムの両方をつくりたい。

《終了審査》

＜プレゼンテーション2＞

プロジェクト名：文京映画交流クラブ

団体：文京映画交流クラブ

＜質疑＞

菊地本部員：引きこもりの方を外に誘い出すという成果は、どのように測定するのか。

プレゼン団体：西片の出前映画会に関しては、引きこもりの方の参加は一人も居なかった。顔を見ただけでは、どの人が引きこもりか全く分からない。ただし、町会の方は、引きこもりの人の目星がついている。西片地区の民生委員に誘い出しをお願いしたが、協力は得られなかった。これからは、町会の人から情報を得ていきたいと考えている。

各務本部員：今後、拡大するうえで、実施体制をどのようにするか、考えやプランを教えて欲しい。

プレゼン団体：今後は支援もなくなり、自主運営になるので、会場費がかかる場合は、文京アカデミーが保有する無料貸出の映画を使い、会場が無料のところでは、有料の日活の映画を上映してきたいと考えている。

各務本部員：実際に運営する人の輪を広げていくこともあり得るか。

プレゼン団体：十分あり得る。西片の町会には、若い女性の方もいる。3/13の出前上映会には都合がつかず、来られなかった方と話をする機会があり、自分たちは民生委員とは別に地域の引きこもりの方を何人も知っているという話を聞いた。次回実施する時には、自分達も動いて引きこもりの方を連れてくると言ってくれている。今後、西片で上映する時は、このような方に協力をお願いしたい。

安藤本部員：女性や若い世代の参加が成長のプロセスになると思う。子育て中の母親が楽しいと思えるような映画を選択することも重要であるし、引きこもりは若者にも非常に増えているので、スタッフとして関わられるような、参画してみたいと思ってもらえる受け皿・コンテンツも重要になると感じた。

井上本部員：「高齢者の方に映画に出演してもらおう」というのは面白いアイデア。例えば、東大で映画を作っているような学生と連携して文京区で撮影をやってみる。そこに高齢者の方に出てもらったり、引きこもりの方には、インターネットを使用した作業を

手伝ってもらったりする。また同時に、引きこもりの人達とつながるために、引きこもりをテーマにしているような学生や研究生と一緒にいるなど、いろいろなやり方があると考えられる。上映会だけにこだわらず、コミュニティのつくり方、映画終了後のお話し会をどのように運営していくのが重要である。

丁本部員：西片の実施で引きこもりの方を連れてこられなかった理由をどのように捉えているか。

プレゼン団体：民生委員が縦の組織になっていることに限界を感じた。民生委員のトップの方に話をし、協力の了承を得たが、その方と西片担当の民生委員は担当地区が違い、西片の民生委員からは「地区担当の上からの指示がないと動けない」と言われた。民生委員に協力してもらうには、4つの地区の、それぞれの高齢者の部会の人に直接アプローチしないと協力は得られないと考えている。

丁本部員：民生委員の方に映画会に来てもらい、体験してもらうことも大切ではないか。

プレゼン団体：3月は時間がなくできなかったが、秋には民生委員の合同会議があり、そこで映画会を体験してもらう予定である。体験してもらった後に、担当地区の引きこもりに声掛けしてもらえればと考えている。

境野協働推進担当課長：第2クールを希望しない理由について教えてほしい。

プレゼン団体：「自由にやりたい」ということが一番大きい。文京区に映画の教室を開きたいとも考えている。第1クールで出前上映会を継続していくことの意味もついたので、今度はもっと自由に自分の考えていることを実現していきたい。メンバーがもっと力をつけて、映画を通して文京区の街をよくしていきたい。

<プレゼンテーション3>

プロジェクト名：地域ブランド「文人郷（ぶんじんきょう）」構築による地域連携事業
団体：NPO 法人 街ing 本郷

<質疑>

菊地本部員：文京区には、全国の市町村の学生会館もあるため、この学生達は有力なステークホルダーになり得るのではないかと。「文人」から「まち」を考えるのではなく、「まち」を中心に「文人」を考えていくやり方に変えたということで、違う方向性になるかもしれないが、お伝えしておきたい。

各務本部員：「文人」と「まち」という関係を、どちらからどちらを見るかということだが、「文人」とすると全国的な広がりを感じるが「まち」という方向に転換したことで、その部分が弱くなってしまったのではないかと懸念している。

プレゼン団体：確かにそういった面もあるが、「文人」を中心に考えると、民間で語れる人が減ってしまうという現状がある。郷土史を語れる協力者がいる。また、そこに住んでいる人にとって一番興味がわくのが「場所」と分かったことから、より多くの方に参加してもらうため、このような形にシフトした。全国にどうやって波及す

るのかという点については、郷土史をベースに話をし、その中で登場する文人に関連して、他の地域と関わっていければと考えている。津和野であれば森鷗外となっているが、本郷には文人が多いため、一人ではなく「まち」にスポットをあてる方が、波及効果が高いのではないかと考えている。

安藤本部員：東京オリンピックが開催される2020年にむけた対策を考えているか。また、話を聞くと大人だけでやっているような印象を受ける。文学を子どもへ伝承するといった視点も考えてほしい。前から話をしているように図書館等とタイアップするなどして、具体的なアウトカムが見えてくるとメディアでも取り上げてもらえるようになるのではないかと考えている。

プレゼン団体：オリンピックについては現時点では考えはないが、色々な地域とコラボレーションできる意味では、とてもいい機会なので、利用できればと思っている。NPO法人街ing本郷本体として、留学生が街とつながりたいと言って訪ねてきている。このあたりを突破口に考えていきたい。また、小中学生向けには、まずは、きっかけづくりとして和菓子づくりなど文人とは直接関係ないところからアプローチしていければと考えている。

安藤本部員：いろいろな助成金などもあるので、2020年に向けてそれらを取りに行くことも含めて考えていただきたい。

井上本部員：当初の熱さがなくなり、あまり進んでいない感じがする。会員募集の話についても、今になってもまだしている。郷土史の話はよくわかるが「文人」の扱いを下げて「郷土史」にフォーカスすると、普通のまちおこしになってしまう。今回のプレゼンで期待していたが出てこなかったのは、文人への愛情、具体的な小説名や地名、エピソードなど。例えば、オリンピックが来るのであれば、ロンドンと繋がれるはずなので、夏目漱石をテーマにイギリスとも繋がることもできる。みなさんがこれは熱い、楽しいと思うことを文人の名前を使って、オリンピックを使って実施する。真面目に対応するより、突破した方がいいと思う。もっといろいろとやり方があるのに、小さな方向に行ってしまったのではと感じてしまった。文人は掘り下げれば色々なものがでると思う。最初は、特定の文人にフォーカスした方がよいと思う。

プレゼン団体：「文人が薄くなっている」の指摘はもっともで、作戦会議をしていく。「文人」について諦めるつもりはない。津和野町のアンテナショップが文京区にできることもあり、チャンスは来ていると思っている。津和野町の知り合いも多いので、協力しながら何か行っていければと考えている。

4 プロジェクトの審査について

選考委員の合議により、子育て kitchen を継続して「継続力向上」の区分で支援することを決定した。また、映画交流クラブ及び NPO 法人街 ing 本郷の終了についても承認した。

5 新たな公共プロジェクトの本年度の振り返りと次年度の予定について

境野協働推進担当課長：資料第15号から第16号に基づき説明

安藤本部員：報告書は内向きの資料かと思うが、外に向けて発信するポジティブなものがあるのか。例えば、NPO法人街ing本郷と我々が語り合うとか、ポジティブなメッセージが出せればいいと思う。次のプロジェクト支援にどれくらい人が来るのかというのが大切。他の人が参加したいと思ってもらえるような見せ方が必要。

境野協働推進担当課長：情報提供としては、ソーシャル・イノベーションニュースを作成・発行している。3月号は、これまでのメンターとして協力いただいた方の言葉も入れ、一年の取組をポイントを絞って伝えるような形にする。4月号に関しては、5月に予定している地域活動講座の案内を載せ、次期プロジェクト支援の選考に繋げていきたいと考えている。

安藤本部員：書面もいいが、イベントなど立体的なものが何かあればいいと思う。

菊地本部員：支援の対象となること自体が、注目されるヒーローインタビューに値すると思う。プロジェクト支援を受けることの大変さなども発信できればいいのではないか。また、外向けに文京区の取組が他の自治体からどのように見られているのか、行政視察や資料の問い合わせなどについても発信していくとよいのではなか。

境野協働推進担当課長：福岡市の職員や静岡県立大学の方が視察に来ている。また、全国区長が加入している青年市長会でも文京区の新たな取組を発信している。また、杉並区へも出向き発表した。キックオフ・イベントや社会起業フェスタには台東区や新宿区の職員も来られた。

安藤本部員：そういうことをFacebookに載せた方がよいのではないか。このプロジェクトが注目されているというのを伝えるのも大切である。

安藤本部員：我々本部員と支援団体とがフラットな場での対話のできるような場を設けてほしい。

各務本部員：難しいかもしれないが、支援プロジェクトに職員が出向し、事業づくりを実際に体験できる機会がつけれるとよいと思う。

6 その他

境野協働推進担当課長：審査結果は、明日までに各団体へ伝える。

田中区民部長：次回本部は7月28日（月）。午前中に開催するので、予定をお願いしたい

7 閉会

以上